

イスラーム政党をめぐる研究視座と方法論的課題

—比較政治学と地域研究の交差する地点で—

小 杉 泰 *

Methodological Perspectives and Research Issues in the Study of "Islamic Political Parties": At the Junction of Comparative Politics and Area Studies

KOSUGI Yasushi*

For Area Studies to be interdisciplinary, or transdisciplinary, it must go beyond the mere combination of achievements of different disciplines in relation to a particular case in a particular region. Research has to be conducted in such a manner that a new horizon emerges as a result of intellectual endeavour of a researcher who encompasses more than one discipline while he/she tries to penetrate into indigenous society and read its inherent logic. A case study, simply applying disciplinary methods to a particular region, is not a work of Area Studies, even it is a good work in the discipline. Equally, a work in Area Studies, lacking any disciplinary foundation or methodological perspective, could be quite unscientific.

It goes without saying, therefore, that an Area specialist should strive to open a dimension where disciplinary-founded methodologies and area-specific / field-based knowledge can compliment each other. There are no easy roads to achieve it, and constant trial to merge the two is essential. The cooperation of the two is important both at personal and collective levels for academic works. The cooperation has been, however, largely absent between Comparative Politics (or, even Political Science in general) and Middle East Area Studies. As a part of efforts to overcome this unfortunate situation, this article proposes to set "Islamic political parties" as a field of study, which challenges the conventional wisdoms of comparative politics, such as presumed secularism of modern politics, while fills a gap in Middle Eastern politics.

Survey on Islamic countries shows that there are a significant number of political parties that claim to be Islamic ones or are considered as such in their respective societies. At the analytical level, they can be categorized as a particular kind of political parties based on ideologies of Islamic politics, such as non-dualism of religion and politics. Prospects of "Islamic democracy" where these Islamic political parties compete with each other and with other (non-Islamic) parties seem quite important as a political phenomenon in Asia and Africa.

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

はじめに

本稿は、イスラーム政党を研究対象として設定することの意義と必要性をめぐって、3つの点について問題提起をすることを目的としている。

第1に、従来の比較政治学の諸研究において、中東やイスラーム世界が極端に少ない事例しか扱われていないことを指摘し、中東やイスラームと関わる事例を含み込む形で理論、モデル、類型の精緻化を図ることが、比較政治学と地域研究の学際的で有機的な連携を進めるうえで相応の意味を持つであろうこと。

第2に、イスラーム政治と関わる事例は、従来の分析方法になじまない諸問題を孕んでいるが、それは政教分離や世俗国家を近代性の自明の前提とすることから生じていると思われること。したがって、「宗教」概念の真にグローバルな再定式化を含めて、政教関係を分析するための、より柔軟で有意なモデル化、類型化がなされるべきであろうこと。

第3に、そのような試みの1つとして、「イスラーム政党」という概念、類型を論じることの意義があり、また、実態としてもそのような対象領域を設けて分析する必要性が生じていると判断されること。

1. 課題の所在

1.1 比較政治学と地域研究の学際的連携

世界に存在する多様な政治的な現象を比較し、グローバルで総合的な視点から人間の諸社会の政治現象を分析・理解する科学としての比較政治学の意義はあらためて述べるまでもない。また、実際の研究において、世界の諸地域を対象とする地域研究の方法と成果を比較政治学の理論的な研究と統合すること—少なくとも両者が学際的に連携していること—が必要かつ有用であることは、広く認められていることであろう。

言うまでもなく、政治の諸現象の分析は、演繹的な理論の適用だけではなく、理論と事例を有機的に結合することで行われる。その点から言えば、どれほど確立された理論であっても、これまで全く適用されたことのない地域に対して、アプリオリに理論の有効性を前提として、そこから分析や推論を行うことはできないであろう。理論を直線的に適用しては、地域の事例研究としても不十分とならざるをえないのは当然である。

とはいえ、地域の固有性を語ることによって、理論が特定の地域に適用しえないということ—を一般論として述べることはできない。むしろ、当該地域の事例を十分に組み入れることによって、理論や一般的な了解事項がより豊かになり、適用範囲を広げることが期待されるからである。

さまざまな事例を集め、それらを比較検討し、一般的な理論やモデルを構築する、そして、

それを新しい事例に当てはめ、理論の有効性を検証するとともに、問題点が見つかれば、事例研究、実態研究から帰納して、その理論やモデルを精緻化する、また必要に応じて新しいモデルや類型を提出することが必要となる。このような研究にとって当たり前のことを述べたのは、この状態が中東政治やイスラーム世界の政治については成立していないと思われるからである。

1.2 中東／イスラーム世界の事例を包摂した、より高次の一般化の必要性

日本国内を見ても、さらに国際的に視野を広げても、比較政治学を含む政治学の諸分野をディシプリンの背景として中東政治を分析する研究者は非常に数が少ない。中東を対象とする政治学者の数も少ないし、政治学を主要なディシプリンとする中東地域研究者の数も少ない。結果として、中東地域研究においては、比較政治学と地域研究の有機的連携は生じていないと判断せざるをえない状態にある。

比較政治学における中東やイスラーム世界の「不在」は、かなり深刻な状況にある。本稿は政党政治や民主的プロセスにおける政治参加とイスラームの関係（とりわけ1960～70年代以降）を論じるものであるので、この時期における民主化などを扱った論文集を瞥見してみよう。

[例1] オドンネル、シュミッター、ホワイトヘッド編『権威主義的支配からの移行—民主主義の可能性』[O'Donnel, Schmitter and Whitehead 1986]

4部構成で、第1部：南ヨーロッパ、第2部：ラテン・アメリカ、第3部：比較研究、第4部：結論となっている。第1部にトルコが入っているものの、アラブ諸国は研究対象として除外されている。エジプトは権威主義体制から民主化への移行に関する重要な事例の1つであるが、一切言及されていない。

[例2] ダイヤモンド、リンズ、リップセット編『発展途上国における民主主義』[Diamond, Linz and Lipset 1988-89]

4巻に及ぶ詳細な研究である。第1巻は理論的分析、第2巻はアフリカを対象とし、事例としては（掲載順に列記するならば）ナイジェリア、ガーナ、セネガル、ボツワナ、ジンバブエ、ウガンダが取り上げられている。第3巻はアジアが対象で、事例としてはインド、パキスタン、スリランカ、トルコ、フィリピン、韓国、タイ、マレーシア、パプア・ニューギニア、インドネシアが取り上げられている。第4巻はラテン・アメリカで、アルゼンチン、ブラジル、チリ、ウルグアイ、ベネズエラ、コロンビア、ペルー、コスタリカ、ドミニカ共和国、メキシコが事例となっている。

中東を地理的に分ければ西アジアと北アフリカに相当するが、西アジアからは、アジアの一部としてトルコだけが入っている。アフリカの巻はサハラ以南のアフリカなので、北アフリカはアフリカの中に含まれていない。結果として、アラブ諸国は1つも含まれていない。

「イスラーム諸国」としてみれば、トルコのほかに、パキスタン、マレーシア、インドネシア、ナイジェリア、セネガルが入っているが、歴史および国民の宗教区分という背景説明を除くと、イスラームへの言及は希薄である。

〔例3〕ダイヤモンド編『発展途上国における政治文化と民主主義』[Diamond, L. 1994]

ダイヤモンドが「政治文化への回帰」と題する序文を寄せている。対象を、掲載されている論文の順に列挙すれば、インド、アフリカ、コスタリカ、台湾、東欧、韓国、ナイジェリア、トルコ、タイ、ブラジル、ラテン・アメリカ、イスラエル、エジプトである。中東からは、トルコ、イスラエルに加えて、ようやくエジプトが登場している。

以上の3研究はいずれも政治学的に重きをなしているものであり、これらを代表例として中東の「不在」を論じることは決して不当ではないであろう。次の例は、国民投票に関する事例の比較研究である。

〔例4〕バター、ラニー編『世界におけるレファレンダム—増加する直接民主主義の活用』[Butler and Ranney 1994]

これは、近年増加しつつある国民投票を世界的に比較研究している。対象となっている期間において、もっとも多く国民投票を実施したのはエジプトである。回数で言えば、エジプトが19回で、次に多いのはウルグアイ、ニュージーランドの13回となっている。ところが、エジプトが1番多いことが注に1カ所言及があるだけで、エジプトの事例は一切論じられていない。これを不当と考えるのは、エジプトを研究対象としている筆者の偏見であろうか。

欠如だけを例として挙げるのはフェアではないかもしれない。次の論文集では、中東は1つの重要な地域として扱われており、その中では主要国が非民主主義国も含めて論究の対象となっている。

〔例5〕ヘルド編『民主主義の可能性—東西南北』[Held 1993]

4部構成となっている。第1部：序、第2部：理論的考察、第3部：実体的イシュー、と展開した後、第4部が「比較考察」である。ここでは、東欧、ラテン・アメリカ、サハラ以南アフリカ、アジアが論じられた後、中東も取り上げられている。

このように見てくると、中東が完全に不在なわけではないが、深刻な「欠如」が存在すると結論せざるをえなくなる。それはなぜであろうか。

民主化を論じる際に、中東には考察に値する事例がなかった、と想像することは可能かもしれない。しかし、仮にそうだとすると、それが多少なりとも事実であるのは、80年代に刊行された〔例1〕〔例2〕までのことであろう。80年代末から90年代前半において中東および北アフリカではさまざまな民主化プロセスが見られた。

その点では、グレン・ロビンソンが、ヨルダンの事例を考察する中で、「この〔民主化論の〕論議から中東が排除されているのは、部分的には、この地域での民主化の事例が少なく、それらの事例における民主主義の限定性のためである。しかし、近年ある程度の政治的自由化を経験している国一つつまり、ヨルダン、クウェート、レバノン、モロッコ—の数、そしてアルジェリア、エジプト、チュニジアのように『阻害されている』事例に内包されている豊かな理論的イシューを考えると、中東を一般的な検討から排除していることは注目に値する」〔Robinson 1997: 373-374〕と述べているが、この指摘に同意せざるをえない。

上に見た諸作は、いずれも比較政治学の側からの研究書であるが、中東地域研究の方から見た場合どうであろうか。ここでは、近年の中東政治研究を概観し、評価しているリーチの編書から研究の現状を見てみよう。

〔例6〕バーナード・ライク編『中東・北アフリカに関する政治学的研究ハンドブック』〔Reich 1998〕

このハンドブックは国別に政治学的研究の成果と課題を概観している。扱われているのは、アルジェリア、エジプト、湾岸諸国（バハレーン、クウェート、オマーン、カタール、アラブ首長国連邦）、イラン、イラク、イスラエル、ヨルダン、レバノン、リビア、モロッコ、サウジアラビア、シリア、チュニジア、トルコ、イエメン、と網羅的である。そのほか、国際関係、政治経済にそれぞれ章が割かれている。

それらを見ると、民主化、選挙、政党に関する研究はきわめて少ないことが判明する。つまり、中東政治を専門とする研究者の側でも、このような問題に対して、地域の事例からほとんど貢献していないことがわかる。

これでは、他地域の側から比較研究を試みようとしても、カウンターパートが見つからないことになるであろう。ちなみに、20年以上も前に行われた北米中東学会の調査プロジェクトの報告書『中東研究—人文・社会科学における研究と学問』〔Binder 1976〕の政治学の章を見ると、選挙に関する研究がかなり多いという指摘とともに、制度的に研究可能な国に限られているためにトルコ、レバノン、イスラエルなどに対象が偏っているとの指摘がなされている。この状態には、選挙に対して、当時政治的近代化の観点からの関心が高かったことの影響があるかもしれない。いずれにしても、当時と比べて、選挙や国民投票の制度を研究することができ

る国が大幅に増えているにもかかわらず、最近ではむしろ関心が低調なことは注目に値する。

とりあえず、比較政治学の側からも、中東地域研究の側からも、中東について民主化や政党政治を対象とする研究が非常に少ないことは、確認されるであろう。あたかも、比較政治学が中東を無視するか、避けているかのような現状が生まれた原因は、研究史的に興味深い点であるが、その検討は別の機会に譲ろう。

ただ、ひとつ指摘できるのは、民族主義や民族主義に立脚する権威主義体制が後退した時期に、他地域と違って、中東ではいわゆる「イスラーム復興」の現象が顕在化し、きわめて「特殊」と思われる状態となったことである。その結果として、端的に言えば、イスラーム革命を行ったイランで、選挙制度がもっとも定着するという逆説的な現実が生まれた。イスラーム革命が近代的な世俗国家や政教分離を前提とする民主主義に敵対しているとすれば、これはそれまでの民主化論とは矛盾する。ところが、制度的にだけ見れば、イランは明らかに周辺アラブ諸国のいずれよりも民主的であり、困惑せざるをえない。この困惑が、イスラーム復興以降の中東や「イスラーム政治」の特殊性を「原理主義」によって解き明かす余地を生んだことは疑いをいれない（このことの問題性はすでに何度も論じているので、ここでは繰り返さない）。

1.3 方法論的な諸問題

中東政治をめぐる比較政治学的な事例研究の不足は、中東での政治現象を比較政治学的に理解することを困難とするだけでなく、比較政治学の方法論やアプローチが中東での事例研究にとって有用なものとして発展することを阻害する。

方法論的に見た場合、「イスラーム政治」が分析しにくい理由がいくつか考えられる。最大の問題は、政治学が「政教分離」「世俗国家」を近代政治における暗黙の了解としていることの問題性であろう。

『現代政治学小辞典（新版）』[阿部ほか 1999]において、「政治と宗教」について「政治と宗教の分離ないしは政治の宗教からの自律化は、近代社会以降に一般化した現象である。…近代社会においては、社会構成の複雑化に伴い、宗教的原理では覆い尽くせない世俗の生活領域が拡大し、宗教の政治に対する規制力は極度に縮小した」と述べられている。イスラーム復興は、まさにこのような状態に対するアンチテーゼとして、顕在化した。

近代的政治が政教分離を前提とすべきという、私たちが共有する規範的な命題を脇に置いて、対象を素直に見るならば、イスラーム世界の場合、政教分離を前提としない認識が強いため、政治のあり方も政教分離型のそれと非常に異なっていることが判然とする。多少脇道に逸れるが、ここでイスラーム政治の特徴について概論して、その点をめぐる論点を整理しておこう [cf. 小杉 1994].

理解を妨げる最大の問題は、イスラームが「政教一致」ではないことである。政教分離と政教一致は、同じ論理体系内の2つの類型である。そこでは、「政」「教」の2つの領域があるこ

とを認めたらうで、両者の一致または分離を論じている。ところが、イスラームでは「政」「教」の2つの領域があるという前提から認識が始まるわけではない。したがって、イスラームは「政教一致」ですらないのである。

「政」「教」を分ける認識形態（あるいは、そのような分節化が行われている社会）を、筆者は「政教二元論」であるとして、イスラームはそれとは異なる「政教一元論」であるとの説明を行ってきた。政教二元論では、「政」「教」という水平軸上に領域の分化が生じているとして、これを「水平分化」と呼ぶ。イスラームの場合、この軸上には分化は生じない。むしろ、垂直的に分化が生じる。垂直軸を「正当性—権力」軸とすると、イスラームではこの軸上に分化が生じて、上位に「神の法」があり、下位に「人間の共同体」ひいては国家があることになる。

これを言いかえれば「法政二元論」である（この類型化では、西洋型の論理では、法と国家を分離することには意味はないから、イスラームと比べていうならば法政一元論であることになる。もちろん、「一元論」はそのように分節化して認識することがない状態を言うのであるから、西洋型をわざわざ法政一元論だと定式化する必要はない。イスラームが「政教一元論」であると論じることの意味は、あくまで政教二元論が優勢なパラダイムだからである）。

法政二元論では、「法」「政」が別なのであるから、理論的には「法政一致」と「法政分離」がありうる。伝統的なイスラーム国家はほとんどが「法政一致」を前提としていたが、近現代においては「世俗主義」の考え方が登場してきた。従来は、イスラーム世界における世俗主義は西洋的な世俗主義を輸入したものであると考えられてきた（つまり、政教二元論における政教分離の適用）。たしかに、20世紀初頭から半ばにかけて、世俗主義を主張したエリートたちは、十分に西洋的な世俗主義を理解したかもしれない。しかし、その後の展開を見るならば、政教一元論的な文化の中で育った人々は明らかに、世俗主義を法政二元論的な論理で理解している。つまり、それは「法政分離」、すなわちイスラーム法と国家の分離であり、国家のイスラーム法からの自由を指している。

イスラーム的な政教一元論の展開では、上位のイスラーム法も下位の国家も、政教の両面を含む。イスラーム法は宗教行為だけではなく、刑罰や商行為を律するうえに、憲法的規定や国際関係に関する規定も持っている。国家の方も、政治を行うだけではなく、宗教施設にも関与するし、モスクでの金曜礼拝の際には当該国家の元首のために神の加護を祈るよう要求する。「世俗主義」によって法政分離を行うと、イスラーム法は上位において国家を規制する力を失う。しかし、政教一元論が消滅したわけではないので、国家がモスクを管理することは特に異とはされない。むしろ、世俗主義を守るためには、モスクを拠点とするウラマー（イスラーム学者）がイスラーム法の優位性を主張することを抑制するためにも、国家がモスクを積極的に管理し、そこでの言説を操縦する方が望ましいのである。現在のトルコやエジプトでの「世俗主義」とはこのような性質のものであり、そこでは国庫から宗教施設に支出をすることが政

教分離の原則に反するといった議論は、さほどの力を持っていない。

筆者は以上のような、いささか乱暴な一般化を伴う論議によって、「イスラーム政治」の理解を深化させようと努めてきたが、実は、これはイスラームに限った問題ではない。アジア・アフリカでは、元来宗教性が強く、「近代化とともに宗教は、政治は言うまでもなく社会的機能を全般的に低減させるであろう」という予想は多くの地域で外れている。宗教復興の広がりとは質はさまざまであるが、20世紀後半において（そして21世紀初頭において）宗教を完全に排除してアジアやアフリカの（さらには欧・米も含めて）政治を論じることはできなくなっている。しかも、政教一元的な様相がアジアの各地に見られるのである。インドは「世界最大の民主主義国」であるが、本来はヒンドゥー的な世界観においても法と国家は分離されるようなものではなく、そのことを考慮に入れた考察が必要とされる。

もちろん、従来から、宗教組織や教会を政治的アクターとして分析対象とすることは行われてきた。また、政教関係についての議論は、世界的な宗教復興や非西洋諸国における政教関係の複雑さに鑑み、それなりに進展してきている。しかし、それはおおむね近代西洋的な「宗教」認識を前提としていた。その「宗教」概念がキリスト教のそれを原型としていることは広く知られている。政教一致や分離というときの「宗教」は、キリスト教的なあり方を暗黙に前提としている。しかし、よりグローバルに考えることが求められている今日、これでは不十分なのではないだろうか。

世界の諸宗教を平明に見て、より普遍性のある、真にグローバルな「宗教」の概念なり認識を組み立てる必要があるように思われる。そのうえで、政教関係の、より一般的なモデルが構築されるべきではないだろうか。これは宗教学の課題かもしれないが、宗教の政治化がいくつもの地域で問題となっている今日、それはつとめて政治学的な課題でもあるように思われる。

以上のような問題意識を背景として、「イスラーム政党」を論題としたい。それをすることによって、政治と宗教、宗教と政党政治をめぐる従来の議論に、新しい視点をもたらし、比較政治学的な研究の幅をいっそう広げることができるのではないかと、この期待を持っている。そして、それによって、イスラーム世界の政治を理解するための方法論について、比較政治学の側からの貢献を得て、これまでの研究の「欠如」を少しずつ埋めていきたいと考えるものである。

2. 「イスラーム政党」というカテゴリー

2.1 実体概念として

政治研究では、架空の設問に基づいて対象を設定することには意味はないであろう。したがって、「イスラーム政党」を論じるには、そのように自称したり、自称はしなくともその社会の中でイスラーム政党だと言われるような政党が存在するのか否かを、最初に見なくてはならない。

その結果、表1が得られた。「イスラーム政党」であるか否かの基準は、(1) 政党と自己規定する政治組織である(政党と名乗るか、当該国の政党法によって登録している)、(2) 公然と何らかの形で「政治へのイスラームの適用」を実現すべき目標として掲げている、とした。後者の条件に合致しても、「運動」「戦線」「協会」などと名乗り、政党と自己規定しない組織は、こ

表1 イスラーム政党 (地域的におおむね西から東へ配列)

国名	政党名
モーリタニア (イスラーム共和国)	ウンマ党 [1991～]
モロッコ (王国)	国民再生党 [1992, 不認可] / 統一発展党 [1992, 不認可]
アルジェリア	イスラーム救済戦線 [1989～; 92年, 非合法化] / 社会と平和のための運動 [1991～] / イスラーム復興 (ナフダ) 運動 [1990～] / ウンマ運動 [1990～]
チュニジア	復興 (ナフダ) 党 [イスラーム志向運動= 1981～が88年改称, 非合法]
エジプト	社会主義労働党 [1977～; 既存政党が綱領を変更してイスラーム政党化] / ウンマ党 [1984～] / ワサト党 [未認可]
スーダン	ウンマ党 [1945～]
トルコ	国家秩序党 [1970～71] / 国民救済党 [1972～80] / 福祉党 [1984～98] / 美德党 [1997～]
ヨルダン (王国)	イスラーム解放党 [非合法, 1953～] / イスラーム行動戦線党 [1992～]
レバノン	イスラーム集団 [1964～] / ヒズブッラー (神の党) [1983～; 政党としては1992～]
イラク	イスラーム・ダアワ党 [1957～] / イラク・イスラーム党 [40年代～] / トルコマン・イスラーム党 [1991～]
イエメン	イエメン改革連合 [1990～] / 正義党 [1990～] / 民主イスラーム党 [1990～]
コモロ (イスラーム連邦共和国)	正義戦線党
イラン (イスラーム共和国)	イスラーム共和党 [1979～87] / 建設の幹部党 [1996～] / イスラーム連帯党 [1997～] / イスラーム参加戦線 [1998～] / イスラーム労働党 [1999～]
アフガニスタン (イスラーム首長国)	イスラーム党 [1978～] / イスラーム党・ハーリス派 [1978～] / イスラーム統一党 [1990～]
パキスタン (イスラーム共和国)	イスラーム党 (ジャマアアテ・イスラミー) [1941～]
タジキスタン	タジキスタン・イスラーム復興党 [1990～]
バングラデシュ	イスラーム党 (ジャマアアテ・イスラミー)
マレーシア	全マレーシア・イスラーム党 [1951～]
インドネシア	国民党醒党 [1998～] / 国民信託党 [1998～] / 開発統一党 [1973～] / 月星党 [1998～] / 正義党 [1998～] / ナフダトゥル・ウマツ党 [1998～] / マシュミ・インドネシア・イスラーム政党 [1998～] / インドネシア・イスラーム連盟党 [1998～]
フィリピン	オンピア党 [1986～]

出所：小杉 [1996b; 1997a] などから筆者作成。インドネシアについては白石隆氏、イランについては松永泰行氏の教示を得た。

ここには含まれていない。

多くのイスラーム国／地域において、イスラーム政党と自称する政治組織が存在し、選挙などの民主的制度が確立している国においては、それらの政党も選挙に参加している。「イスラーム政党」というカテゴリーで括りうる政党が、当該国の政党政治の一部として機能していることは、確認されるであろう。

しかしながら、イスラーム政党が何であるかは、それほど明確ではない。実体概念として成立しているからと言って、当該社会で厳密な定義がなされているとは限らないのである。イスラーム政党と自称する場合でも、他党との対比においてのみそのイスラーム性が明白と考えられることも多い。また、機能的にそれらのイスラーム政党が非イスラーム政党と何が異なるのか、必ずしも当該社会で明示的に理解されているわけではなさそうである。

イスラーム政党の一部はかなり古くから存在する（1940年代にさかのぼる）。しかし、全体的には、80年代後半から90年代にかけて急増したと言える。イスラーム政党が比較的新しい現象であることは明らかであろう。その意味では、現時点において政党としての機能が未分化だとしても、それは今後イスラーム政党がさまざまに展開されて、実体が輪郭が明確となるに従って考察すべき課題かもしれない。

2.2 分析概念／分析対象として

実体概念として成立しているからと言って、ただちにそれを分析対象とすべきとは限らない。そうすることによって、何が得られるのかを論じる必要がある。また、分析概念として用いるならば、実体概念とは別に、研究者の側から定義を与える必要がある。

その場合、まず「イスラーム政党」は、政党の一類型でなくてはならない。政党の定義としては、有名なサルトーリの次のものがある。

(ア)「政党とは、選挙に際して提出される公式のラベルによって身元が確認され、選挙（自由選挙であれ、制限選挙であれ）を通じて候補者を公職に就けさせることができるすべての政治集団である」[サルトーリ 1992: 111]。

しかし、この定義は、選挙が許容されているとは限らないイスラーム諸国の事例の場合、直ちに用いるのは困難である。

(イ)「メンバー間の何らかの程度の政治的志向の一致に基づいて結成され、国民的利益を集約し、選挙民の支持を背景に政権を担当し、あるいは政権獲得をめざす政治集団」[阿部ほか 1999: 254] という定義も、「選挙民」という以上選挙を暗黙の前提としているが、これを「支持者」と読み替えるとイスラーム政党にも適用できるように思われる。

(イ)に従うならば、「メンバー間の何らかの程度の政治的志向の一致」の内容を細分化の基準とすることも可能であろう（もちろん、組織論からは、幹部政党、大衆組織政党などの区分も可能であるが、イスラーム政党はそのイデオロギーに特徴があると考えられるので、政治的

志向性を重視したい)。それによって、民主主義政党、共産党（共産主義政党）、社会主義政党、社会民主主義政党、キリスト教民主主義政党などの類型がありうるとしたら、このような類型の1つとしてイスラーム政党を位置づけることが許されるのではないだろうか。

政教関係の問題を再考すべきと、上で触れたが、イスラームの根幹に宗教がある以上、イスラーム政党とは宗教政党ではないかという疑問が当然生じるであろう。しかし、イスラーム政党は、いわゆる「宗教政党」「教権党」ではないと判断される。

イスラームは政教一元論であることは上述したが、政教を含み込むということは、実はイスラームの大半が世俗事項であることを意味する。イスラーム法の内容構成を見ても、そうである。たとえば商業行為に関する法規定は、啓典クルアーン（コーラン）に究極的な根拠があるとうことを除けば、非宗教的な契約行為をめぐる規定にすぎない。イスラーム政党はいずれも、明確に政治の領域においてその目的を遂げることをめざしている。たしかに、その際にイスラーム的な政治を実現させようとすることは、宗教的倫理に基づいていると考えられるが、その内容は政治に関するイスラーム法の規定（いわゆる「統治の諸規則」）を適用しようとするものである。それは宗教事項の規定ではない。

あえて言えば、そのような思想的拘束性が強いために、イスラーム政党には「プログラム政党」となる傾向があるとすべきかもしれない（プログラム政党の反対の極にプラグマティズム政党が位置づけられる [岡沢 1988: 41-42]）。

「宗教政党」が宗教団体の政治部門として設立されたり、宗教的理念そのものを政治に実現しようとするものであるとするならば、イスラーム政党はそのようなものではなく、むしろ「イスラームに思想的基盤を置く政治イデオロギー」に立脚する政党と考えられる。その意味では、ヨーロッパにおけるキリスト教民主党との比較が有効であろう。

3. イスラーム政党をめぐる6つの視点

以下では、「イスラーム政党」という現象をいかにとらえるべきか、いくつかの論点を整理したい。

3.1 背景としてのイスラーム復興

イスラーム政党は、イスラーム世界に広範に見られるイスラーム復興運動の高揚（20世紀後半、特に60年代以降＝大衆運動の第2次高揚期）を背景として登場したと言える。40年代までに設立された政党は、第1次高揚期（大戦間期）を背景にしているが、イスラーム政党のほとんどは70年代以降に設立されている。

このイスラーム復興を言いかえると、「社会・政治の再イスラーム化」の現象と見ることができる。ここで、相補的・動態的プロセスとしての「イスラーム化」概念について、簡略に述べる。

さまざまなイスラーム諸地域は、歴史の中で次第にイスラーム化した地域であるが、従来は「イスラーム化」の用語は徐々にイスラームが広まり、住民の改宗が増えていく過程と理解されてきた。しかし、イスラーム化とはその地域がイスラーム化するとともに、その地においてイスラームが現地化、地域化するプロセスと考えられる [小杉 1999b]。

また、イスラーム化／現地化だけが一方的に進行するわけではない。逆転現象と言うべき、脱イスラーム化も生じる。植民地化、植民地期以降の独立国家が、世俗化、脱イスラーム化を推進することも、しばしば起こるし、旧ソ連領のように、共産主義による脱イスラーム化の事例もある（植民地化が、それに対抗するイスラーム化を伴う場合もある）。脱イスラーム化の場合、相補的に生じるのは、イスラームを外来のものでとらえ直すような「外在化」である。

こうした流れに対して、さらに再イスラーム化が生じる場合がある。20世紀後半においてイスラーム世界の各地でそれが顕在化したことは、言うまでもない。再イスラーム化は、イスラームの再・現地化を伴う場合もあるが、現代における再イスラーム化の最大の特徴は相補的に現代化・グローバル化が生じていることである。つまり、当該社会の再イスラーム化が進む場合に、そのイスラーム自体が現代的な諸条件、グローバルな諸条件に反応、対応するような形のものとなっていく。

3つのプロセスを並べると、

- ・イスラーム化／現地化・地域化
- ・脱イスラーム化／外在化
- ・再イスラーム化／現代化・グローバル化

と定式化することができる。

以上の「イスラーム化」概念を用いて表現するならば、「イスラーム政党」とは、「再イスラーム化／現代化（近代的政党制度）・グローバル化（民主化）」の現象ととらえることができる。再イスラーム化とは、現代的な諸条件およびグローバル化に対応して、再定義されたイスラームによってイスラーム化が進行するプロセスである。その一環としてイスラーム政党が登場したと考えられるわけであるが、現代的諸条件の中では近代的な政党制度の成立・広がり、そしてグローバル化の諸現象の中では民主化の広がりが、再定義されたイスラーム政治の中で「イスラーム政党」が登場する契機を提供していると言えよう。

3.2 明確な世俗主義への対抗関係

再イスラーム化を、単純に脱イスラーム化への反作用であるとすることはできないが、政治の文脈ではとりあえずそうとらえても決して間違いではない。特に、脱イスラーム化の中でも、イスラームを極端に外在化させる世俗主義・世俗国家の採用に対して、強く反対し、対抗しようとするものである。

ここから、対立軸が構成される。つまり、世俗主義政治・世俗主義政党へのアンチテーゼとしてのイスラーム政治であり、イスラーム政党である。

3.3 先行する諸政党の影響

再イスラーム化を補完する「現代化」を、上では近代的政党制度への対応性としたが、近代的な政党制度や議会制そのものが西洋からの輸入という側面を持っており、イスラーム政党が登場する以前にそれらの制度が現地化をともしつつ、導入されている（イスラーム政党が最初の政党として設立された国はない）。イスラーム政党が対応する現代化は、すでに現地化された近代的諸制度であるため、当該国の近現代における歴史的条件も大きな影響を及ぼす。

共和制を採るアラブ諸国の場合、先行する政党は主として、自由主義政党、民族主義政党、社会主義政党、革命政党などである。たとえば、ヨルダンにおけるイスラーム解放党（1953年設立）を、同時期に先行し、影響力を広げつつあったアラブ民族主義の政党のイスラーム版と見ることもできる（特に、軍隊に支持者を広げて政権を奪取するという構想など）。

いうまでもなく、既存の政党だけではなく、当該国の既存の体制、政治の影響も大きい。端的に言って、政党の設立が許されていない国においては、イスラーム政党は非合法の反体制組織であるか、政党ではない団体として存在せざるをえない。たとえば、クウェートでは比較的自由的な選挙が行われ、議会制度も機能しているにもかかわらず、政党は認められていない。そのため、「社会改革協会」「文化遺産復興協会」といった団体が事実上の政党として議員団を生み出す結果となっている（公式には政党ではないため、これらの団体は、表1には挙げられていない）。

3.4 伝統的イスラームと政党の否定

再イスラーム化／現代化に伴って、現代政治を担う政党のいわばイスラーム版が登場することは、自明のように思われるかもしれない。そこでは、イスラーム政党とはイスラーム国家の実現をめざす政党である、というように単純に理解されうるであろう。

しかし、伝統的なイスラーム国家論では、政党はきわめて否定的な存在であった。

今日でも、「党派＝分裂主義」論は有力な議論であり、それに基づいて「政党はイスラーム法上ハラーム（非合法）である」と主張する見解も、少数意見になりつつあるとはいえ、決して皆無ではない [Şafi al-Rahmān 1987]。

政党（アラビア語の「ヒズブ、*hizb*）をファクション（徒党）として否定する見解には、歴史的背景がある。17世紀のイギリスでも政党への否定的認識が強かったようである [岸本・松岡 1999: 255] が、イスラームにとっての歴史的教訓は、初期イスラームの理想は諸宗派・党派の分裂によって失われたということであろう。現代思想においても、初期イスラームをいかに現代的に再解釈して、あるべきイスラーム国家像を求めるかは重要な課題となっている（たとえば、イラン・イスラーム共和国は、それに対するホメイニー流の解答であった）。そこ

で党派性が強く否定されるのは、当然であろう。

イスラーム全体の団結を強調したスンナ派（今日のイスラーム世界の9割を占める）であれ、シーア派内部の意見統一に腐心した12イマーム派（イラン、イラクなどで大半を占める）であれ、党派・分派の時代から和合の時代（おおむね16世紀以降）までは非常に長い道程であった。したがって、党派性について伝統的な法学者の見解が否定的であったのは当然である。

もう1つの理由は、伝統的な法学が関心を持ったのは「統治の諸規則」であり、民衆の政治参加というような問題ではなかった点にある。統治の観点からは、党派が分裂や無秩序につながりやすい存在とされるのは無理からぬところであろう。

しかし、19世紀以降、新しい政治の形が登場した。1つは立憲制であり、もう1つは政党制である。特に20世紀に入って、大衆政治が登場すると、大衆政党が設立されるようになり、街頭闘争などとともに大衆組織の重要性が増した。イスラーム復興運動も大衆化が始まった。しかし、1930年代までのイスラーム復興運動はいずれも政党ではないし、政党になるべきではないとの立場を取っていた。政党よりも古くから存在する運動として、たとえば、イスラーム法協会（エジプト）、イスラーム同盟（インドネシア）、ナフダトゥル・ウラマ（インドネシア）、ムスリム同胞団（エジプト）などがある。

スンナ派のイスラーム復興の理論的基礎を作ったラシード・リダー（1865～1935）は、「われわれは中道派イスラーム改革党」と主張した。「党（ヒズブ）」という語は使ったが、中道を主張することで、党派性を否定したのであった〔小杉 1994: 191〕。

しかし、イスラーム諸国の脱イスラーム化は進行しており、イスラームとは関係のない形で、政党政治が導入されつつあった。自由主義や民族主義の諸政党が誕生した。政党の政治的な有効性が確認されると、伝統的見解に反して、イスラームを目的とする政党があるべきとの主張も見られるようになった。

パキスタンのジャマアテ・イスラーミー（1941年）は先駆的であるが、ウルドゥー語の「ジャマア」は「集団」の意味も「党」の意味もある。原語（アラビア語）では、「ジャマア、jamā'a」は正当な集団を意味する。

ヨルダンのイスラーム解放党（1953年設立）は、党派性を顕わにした先駆的なイスラーム政党であるが、それゆえに忌避される面も強かった。イラクのイスラーム・ダアワ党（1957年設立）の場合は、すでに民族主義、社会主義、共産主義の党派がいくつも登場していた時代状況に対応していた。しかし、ダアワ党設立の時点では、まだ、イスラームの原則が政党を許容するという見解は少数派であった。

このような状況を決定的に変化させた重要な現象は、ヒズブラー〔神の党〕の登場であろう。この語は啓典クルアーンに根拠がある（食卓章第56節など）。「ヒズブ（党、党派）」の語は、クルアーンの中でも否定的に使われる場合が多いが、「ヒズブラー（神の党）」だけは肯

定的に使われている。ヒズブッラーはクルアーン的シンボルを利用して、「神の党」（本来はイスラームのこと）を名乗ることで、「党派性」の議論を凍結することに成功したのであった。ヒズブッラーは革命後のイランで登場したが、1983年にはレバノンでも結成された（ほかに、イエメン、リビア、サウジアラビア、トルコなどで同名の組織が登場しているが、実態が不明か、ごく小組織にとどまっている）。レバノンのヒズブッラーは、1992年の国会選挙で議員団を生み出し、公式の政党としても十分に機能している [Suechika 2000]。

80年代からのイスラーム政党の設立は、政治の自由化、民主化の流れと結びついており、多くのイスラーム政党は選挙が行われれば参加して、イスラーム的なプログラムを民主的プロセスで実現する、と主張している。

おおまかに見れば、新しい「政党」論が、イスラーム思想の中に誕生してきたと見る事ができよう。つまり、政党は次第にウンマ（イスラーム共同体）の分裂を促進する存在としてではなく、ウンマの合意形成の「道具」として見られるようになってきているのである。

3.5 イスラーム政党ではないもの

以上にイスラーム政党の特徴をいくつか見たが、政党をイスラーム的に合法化する理念が広がってきたことは、ただちにイスラーム運動がすべて政党化していくことを意味しない。スハルト以降のインドネシアで、イスラーム運動・団体が競うようにイスラーム政党を設立したことは記憶に新しいが、インドネシアはこの点についてもっとも先行している事例であろう。

イスラーム復興運動を背景として考えた場合、イスラーム政党を政治に特化したイスラーム復興運動の一類型と見ることもできる。復興運動は、宗教、福祉、経済、法曹などの特定の分野に特化した運動と、それらの諸分野を統合する統合型の運動とに区分することができる。後者は、イスラームの包括的性格を反映していると考えられる。そのような運動がそのままの形で選挙に参加する場合もあるし（レバノンのヒズブッラーなど）、政党を独立組織として設立する場合もある（ヨルダンのムスリム同胞団を母体とするイスラーム行動戦線党など）。包括的性格を持つ運動は、いわゆる政党ではないが、政教関係を考え直すという前記の提案から言えば、政党の定義に合う組織を扱うだけではなく、そのような運動をいかに位置づけるべきか詳細に検討すべきであろう。

政治に特化した運動は、むしろ、政治面でのイスラームの実現こそが優先課題であるとして、自らの特化を正当化する。政治に特化した運動の中には、表1に挙げられたイスラーム政党と機能的に類似した組織も多く見られる。イスラーム政党を研究対象とするとき、どこで線引きをするかは、ひとつの問題であろう。

政党を名乗らない政治組織は、「運動」「戦線」「連合」「集団」などを組織名に付けている。統合型のイスラーム復興運動の場合、「協会」「集団」などが多い。

3.6 民主化との連関

イスラーム政党は明らかに、中東やイスラーム世界における民主化の流れと結びついて増加してきた。サルトーリの定義をただちに適用するのは困難であることは前述したが、長期的に見れば、選挙を定義の一部としてイスラーム政党を論じうるかもしれない。

民主主義をイスラーム思想がどのように考えているかを列挙すれば、4つの立場が挙げられる [Kosugi 1993]。

- (a) 民主主義は西洋のもの。イスラームは自己完結しており、輸入品は不用である。
- (b) イスラームにはシューラー (shūrā, 協議) があり、本来民主的である。また、西洋に学ぶまでもなく、十分民主的である (保守的な湾岸諸国などに多い議論)。
- (c) シューラーは、イスラーム的かつ民主的な原理である。西洋の民主主義は不用であるが、選挙等の制度は「道具」として有用なので、活用すればよい (これが「イスラーム民主主義」に相当する)。
- (d) シューラーとは、要するに西洋の民主主義と同じである。したがって、西洋の民主主義を適用すればよい (近代主義者、西洋化主義者に多い主張)。

見方を変えて、イスラーム・非イスラームを問わず、中東において民主主義をめぐるどのような立場があるか列挙すれば、おおむね次の5つの立場に要約できる。

- (ア) 公権力が自己の正当化に利用する。場合によっては、形式的な選挙を多用。
- (イ) リベラリストの立場で、民主化および自由化を要求する。
- (ウ) アラブ社会主義/民族主義者の立場で、戦略的に民主化を要求する。思想・信条としてどれだけ民主主義を信じているかは、ケースバイケースである。
- (エ) イスラーム主義者の立場で、戦略的に民主化を要求する。おそらく、民主主義を信じているとはいえないであろう。
- (オ) イスラーム民主主義者の立場で、民主化およびイスラーム化を同時並行的に要求する。

おわりに

本稿では「イスラーム政党」という類型が可能であり、中東、イスラーム世界の政治を分析するうえで有効であろうことを述べてきた。その一方で、イスラーム政党が有効であるとすれば、その下位のカテゴリーが示される必要も感じられる。表1からも明らかなように、イスラーム政党と自称する政党の中には、さまざまな実態、多様な思想潮流が含まれている。

いわゆるイスラーム復興の結果、「イスラーム政治」と呼びうる政治の領域が生じたが、さらに、政党政治や政党活動を通じた政治参加の局面において、「イスラーム政党」と自ら名乗り、また周囲からそうみなされる政党が生まれてきた。さまざまな地域にそのような政党が存在する事実を見ると、それらを一括りとしたうえで、どのような内実を持つ政党群であるか検討するに値すると思われる。

「イスラーム政党」というような分類が可能であるとするならば、それと並行して、政教分離や「宗教」の規定をめぐるいくつかの暗黙の了解を再検討することも必要となろう。それを行うことによって、政治学的な分析を異なる諸地域において実践するための視野の広がりも確保できるものと期待される。

また、イスラーム政党の多くはイスラーム民主主義政党か、という議論も可能であろう。筆者は、中東、イスラーム世界で民主化が発展するのであれば、リベラル・デモクラシーとイスラーム民主主義が2大潮流になるのではないかと、という予見を持っている。ヨーロッパで、リベラル・デモクラシーと社会民主主義が2大潮流となっているのと類似の思想的配置図が描けるのではないかと予感するからである。

ディシプリンの理論と地域の実相が交差する地点に立って、比較政治学と地域研究（特に、中東地域研究、さらに「イスラーム政治」の存在する他の諸地域の研究）の有機かつ相補的な連携を希求するならば、「イスラーム政党」という課題の設定が持つ豊かな可能性がおのずと開かれるのではないだろうか。少なくとも、その実現をめざして試行することには、十分な価値があると思われるのである。

- * 本論文は、2000年6月に開催された日本比較政治学会の年次研究大会の分科会「イスラーム政党」（於：京都大学法学部）で行った報告をもとにしている。分科会のコメンテーター（白石隆京都大学教授）および討論にご参加いただいた皆様の貴重なコメントに厚く御礼申し上げたい。

参 考 文 献

日本語文献

- 阿部 齋・内田 満・高柳先男. 1999. 『現代政治学小辞典（新版）』有斐閣.
- 飯塚正人. 1992. 「アリー・アブドラーズィクの『政教分離』思想」『イスラーム世界』37・38.
- 板垣雄三・飯塚正人. 1991. 「イスラーム国家論の展開」柴田三千雄ほか編『国家と革命』岩波書店.
- 岩崎正洋. 1999. 『政党システムの理論』東海大学出版会.
- エスポズイト, ジョン・L. 1997. 『イスラームの脅威：神話か現実か』内藤正典・宇佐美久美子監訳. 明石書店.
- エスポズイト, ジョン; ジョン・ボル. 2000. 『イスラームと民主主義』宮原辰夫・大和隆介訳. 成文堂.
- 岡沢憲美. 1988. 『政党』東京大学出版会.
- 粕谷 元. 1994. 「トルコにおけるカリフ制論議とラーイクリッキ—1922-1924年」『日本中東学会年報』9.
- 岸本広司・松岡 伸. 1999. 「政党」佐藤正志・添谷育志編『政治概念のコンテクスト—近代イギリス政治思想史研究』早稲田大学出版部.
- 小杉 泰. 1984. 「シューラー制度—イスラーム的民主主義の概念」『国際大学大学院国際関係学研究科紀要』2.
- _____. 1988. 『ムスリム同胞団—研究の課題と展望』国際大学国際関係学研究科.
- _____. 1992. 「サウジアラビアにおけるイスラームと民主化—『統治基本法』『シューラー議会法』制定をめぐる』『中東研究』368.
- _____. 1994. 『現代中東とイスラーム政治』昭和堂.

- _____. 1995. 「統治の目的」板垣雄三監修・湯川 武編『イスラーム国家の理念と現実』講座イスラーム世界5. 栄光教育文化研究所.
- _____. 1996a. 「イスラーム市民社会と現代国家」山内昌之編『<イスラーム原理主義>とは何か』岩波書店.
- _____. 1996b. 『イスラームに何がおきているか—現代世界とイスラーム復興』平凡社.
- _____. 1997a. 『中東諸国における民主化と政党・政治組織の研究』日本国際問題研究所.
- _____. 1997b. 「民族・言語・宗教—中東・イスラームからの照射」濱下武志・辛島 昇編『地域史とは何か』山川出版社.
- _____. 1998a. 『イスラーム世界』筑摩書房.
- _____. 1998b. 「帝国主義と自由と人権—中東・イスラーム世界からの逆照射」『工業化と国民形成』岩波講座 世界歴史18. 岩波書店.
- _____. 1999a. 『宗教と国際政治』(『国際政治』121) 日本国際政治学会.
- _____. 1999b. 「イスラーム世界の東西—地域間比較のための方法論的試論」『東南アジア研究』37 (2).
- 小平 修. 1991. 『政党制の比較政治学』ミネルヴァ書房.
- 小林寧子. 1997. 「インドネシアにおけるイスラーム法の成文化」千葉正士編『アジアにおけるイスラーム法の移植』成文堂.
- _____. 2000. 「アブドゥルラフマン・ワヒドの横顔—インドネシアの新大統領」『草思』10.
- サルトーリ, G. 1992. 『現代政党学—政党システム論の分析枠組み』岡沢憲美・川野秀之訳 (新装版) 早稲田大学出版部.
- 柴田敏夫編. 1986. 『国家と宗教のあいだ—比較政治論の視点から』有斐閣.
- 嶋田襄平. 1977. 『イスラームの国家と社会』岩波書店.
- 白鳥 令. 1996. 『現代政党の理論』東海大学出版会.
- 砂田一郎・藪野祐三編. 1990. 『比較政治学の理論』東海大学出版会.
- 中野 実. 1998. 『宗教と政治』新評論.
- 間登志夫. 1991. 『政党組織の比較研究』世界思想社.
- 広瀬崇子編. 1998. 『イスラーム諸国の民主化と民族問題』21世紀の民族と国家3. 未來社.
- ボッピオ, ノルベルト. 1998. 『右と左—政治的区別の理由と意味』片桐薫・片桐圭子訳. お茶の水書房.
- 村川一郎. 1997. 『政党学』第一法規出版.
- 村嶋英治. 1993. 『ASEAN 諸国の政党政治』アジア経済研究所.
- マーワルディー, アル. 1982-88. 「統治の諸規則」『イスラーム世界』19, 22, 27-28. 湯川 武訳.
- 山内昌之編. 1996. 『<イスラーム原理主義>とは何か』岩波書店.
- 湯川 武編. 1995. 『イスラーム国家の理念と現実』栄光教育文化研究所.
- ユルゲンスマイヤー, M.K. 1995. 『ナショナリズムの世俗性と宗教性』阿部美哉訳. 玉川大学出版部.
- 善家幸敏. 1993. 『国家と宗教—政教関係を中心として』成文堂.

英語文献

- Abul-Fadl, Mona. 1989. *Pradigms in Political Science Revisited: Critical Options and Muslim Perspectives*. Herndon: Association of Muslim Social Scientists and International Institute of Islamic Thought.
- Abu-Rabi', Ibrahim M. 1996. *Intellectual Origins of Islamic Resurgence in the Modern Arab World*. New York: State University of New York Press.
- Ahmad, Mumtaz. 1986. *State, Politics and Islam*. Washington, DC: American Trust Publications.
- Allison, Lincoln. 1994. On the Gap between Theories of Democracy and Theories of Democratization, *Democratization* 1 (1).

- Ayoub, Mahmoud Mustafa. 1996. Asian Spirituality and Human Rights, *Encounters* 2 (1).
- Ayubi, Nazih. 1991. *Political Islam: Religion and Politics in the Arab World*. London: Routledge.
- Binder, Leonard, ed. 1976. *The Study of the Middle East*. New York: John Wiley and Sons.
- _____. 1988. *Islamic Liberalism: A Critique of Development Ideologies*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Boullata, I. J. 1990. *Trends and Issues in Contemporary Arab Thought*. Albany: State University of New York Press.
- Brynen, Rex, Bahgat Korany and Paul Noble, eds. 1995. *Political Liberalization and Democratization in the Arab World*. Vol.1. Boulder: Lynne Rienner.
- Bulliet, Richard W. 1999. Twenty Years of Islamic Politics, *Middle East Journal* 53 (2).
- Butler, David and Austin Ranney, eds. 1994. *Referendums around the World: The Growing Use of Direct Democracy*. Washington, D.C.: AEI Press.
- Butterworth, Charles E. 1995. Democracy and Islam, *Middle East Affairs* 2 (2-3).
- Cohen, Amnon. 1980. *Political Parties in the West Bank under the Jordanian Regime, 1949-1967*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Davis, Joyce M. 1997. *Between Jihad and Salaam: Profiles in Islam*. New York: St. Martin's Press.
- Diamond, Linz and Lipset, eds. 1988-89. *Democracy in Developing Countries*. 4 vols. Boulder: Lynne Rienner.
- Diamond, Larry, ed. 1994. *Political Culture and Democracy in Developing Countries*. Boulder: Lynne Rienner.
- Entelis, John P. 1994. Islam, Democracy, and the State: The Reemergence of Authoritarian Politics in Algeria. In John Ruedy, ed., *Islamism and Secularism in North Africa*. New York: St. Martin's Press.
- Eickelman, Dale F. and James Piscatori. 1996. *Muslim Politics*. Princeton: Princeton University Press.
- Esposito, John L. and James P. Piscatori. 1991. Democratization and Islam, *Middle East Journal* 45 (3).
- Esposito, John L., ed. 1995. *The Oxford Encyclopedia of the Modern Islamic World*. New York and Oxford: Oxford University Press.
- Gullner, Ernest. 1994. *Conditions of Liberty: Civil Society and Its Rivals*. London: H. Hamilton.
- Harik, Iliya. 1994. Pluralism in the Arab World, *Journal of Democracy* 5 (3).
- Hefner, Robert W. and Patricia Horvatic, eds. 1997. *Islam in an Era of Nation-states: Politics and Religious Renewal in Muslim Southeast Asia*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Held, David, ed. 1993. *Prospects for Democracy: North, South, East, West*. Cambridge: Polity Press.
- Heper, Metin. 1997. Islam and Democracy in Turkey: Toward a Reconciliation? *Middle East Journal* 51 (1).
- Huntington, Samuel P. 1997. The Future of the Third Wave, *Journal of Democracy* 8 (4).
- Ibrahim, Saad Eddin. 1996. *Egypt, Islam and Democracy: Twelve Critical Essays*. Cairo: American University in Cairo Press.
- Joffe, George. 1997. Democracy, Islam and the Culture of Modernism, *Democratization* 4 (3).
- Kosugi, Yasushi. 1993. The Future of Islamic Revivalist Movements and Democracy, *Japan Review of International Affairs* 7 (2).
- _____. 1996. Democratization and Political Culture in the Arab World: With a Special Reference to the Islamic Revival, *KAMES* 17.
- Laroui, Abdallah. 1997. Western Orientalism and Liberal Islam: Mutual Distrust? *MESA Bulletin* 31 (1).
- Monshipouri, Mahmood. 1994. Islamic Thinking and the Internationalization of Human Rights, *Muslim World* 84 (2-3).
- Moussalli, Ahmad S. 1999. *Historical Dictionary of Islamic Fundamentalist Movements in the Arab World, Iran, and Turkey*. Lanham and London: Scarecrow Press.
- Norton, Augustus Richard, ed. 1995-6. *Civil Society in the Middle East*. 2 vols. Leiden: E.J. Brill.
- O'Donnel, Schmitter and Whitehead, eds. 1986. *Transition from Authoritarian Rule: Prospects for Democracy*. Baltimore

- and London: Johns Hopkins University Press.
- Reich, Bernard, ed. 1998. *Handbook of Political Science Research on the Middle East and North Africa*. Westport and London: Greenwood Press.
- Robinson, Glenn E. 1997. Can Islamists be Democrats?: the Case of Jordan, *Middle East Journal* 51 (3).
- Salame, Ghassan, ed. 1994. *Democracy Without Democrats?: The Renewal of Politics in the Muslim World*. London: I.B. Tauris.
- Sorensen, Georg. 1993. *Democracy and Democratization: Processes and Prospects in a Changing World*. Boulder: Westview Press.
- Springborg, Robert. 1995. Legislative Development as a Key Element of Strategies for Democratization in the Arab World, *Arab Studies Journal* 3 (1).
- Suechika, Kota. 2000. Rethinking Hizballah in Postwar Lebanon: Transformation of an Islamic Organisation, *AJAMES* 15
- Sullivan, Ear L. and Jacqueline S. Ismael, eds. 1991. *The Contemporary Study of the Arab World*. Edmonton: University of Alberta Press.
- Tachau, Frank, ed. 1994. *Political Parties of the Middle East and North America*. London: Mansell.
- Turner, Bryan. 1984. Orientalism and the Problem of Civil Society in Islam. In Asaf Hussain, Robert Olson and Jamil Qureshi, eds., *Orientalism, Islam, and Islamists*. Beltsville: Amana Books.
- White, Gordon. 1994. Civil Society, Democratization and Development (I): Clearing the Analytical Ground, *Democratization* 1 (3).

アラビア語文献

- ‘Abd al-Ḥamīd al-Anṣārī. 1981. *Al-Shūrā wa Atharuhā fī al-Dīmuqrāṭīya*. Cairo: Matba‘a al-Salafiyya.
- Al-Faḍl Shalāq. 1993. *Al-Umma wa al-Dawla*. Beirut: Dār al-Muntakhab al-‘Arabī.
- Al-Sayyid Yūsuf. 1994. *Al-Ikhwān al-Muslimūn: Hal Hiya Ṣaḥwa Islāmīya*. Vol.1. Cairo: Al-Mahrūsa.
- ‘Azzām al-Tamīmī, ed. 1994. *Mushāraka al-Islāmīyīn fī al-Sulṭa*. London: Liberty for the Muslim World.
- Muḥammad Fārūq al-Nabbahān. 1988. *Niẓām Al-Ḥukm fī al-Islām*. Beirut: Mu‘assasa al-Risāla.
- Muḥammad Salīm Al-‘Awwā. 1989. *Fī al-Niẓām al-Siyāsī li-l-Dawla al-Islāmīya*. Cairo: Dār al-Shurūq.
- Muḥammad Mubārak. 1981. *Niẓām al-Islām: Al-Ḥukm wa al-Dawla*. Cairo: Dār al-Fikr.
- Muṣṭafā Kamāl Waṣfī. 1977. *Muṣannaḥa al-Nuẓum al-Islāmīya*. Cairo: Maktaba Wahba.
- Qumayḥa, Jābir. 1988. *Al-Mu‘ārada fī al-Islām*. Cairo: Dār al-Jalā’.
- Rashīd Ridā. 1994. *Maqālāt al-Shaykh Rashīd Ridā al-Siyāsīya*. 5 vols, edited by Yūsuf Ḥusayn Ḍibish and Yūsuf Q. Khūrī. Beirut: Dār Ibn ‘Arabī.
- Ridwān Al-Sayyid. 1984. *Al-Umma wa al-Jamā‘a wa al-Sulṭa*. Beirut: Dār Iqra’.
- Ṣafī al-Raḥmān Al-Mubārakfūrī. 1987. *Al-Aḥzāb al-Siyāsīya fī al-Islām*. Cairo: Dār al-Ṣaḥwa.
- Sulaymān Muḥammad al-Ṭamāwī. n.d. *‘Umar b. al-Khaṭṭāb wa Usūl al-Siyāsa wa al-Idāra al-Ḥadītha*. Cairo: Dār al-Fikr al-‘Arabī.
- Yūsuf Al-Qaraḍāwī. 1993. *Malāmīh al-Mujtama‘ al-Muslim Alladhī Nanshuduhu*. Cairo: Maktaba Wahba.
- Yūsuf Ḍibish, ed. 1990a. *Al-Imām wa al-Imāma ‘inda al-Shī‘a*. Beirut: Dār al-Ḥamrā’.
- _____, ed. 1990b. *Al-Khilāfa wa Shurūṭ al-Za‘āma ‘inda Ahl al-Sunna wa al-Jamā‘a*. Beirut: Dār al-Ḥamrā’.
- Yūsuf Ḍibish and Yasushi Kosugi, eds. 1994. *Al-Saltana fī al-Fikr al-Siyāsī al-Islāmī*. Beirut: Dār al-Ḥamrā’.
- _____, eds. 2000. *Qirā‘āt fī al-Fikr al-Islāmī al-Siyāsī*. Beirut: Amwāj.
- Wahba al-Zuḥaylī. 1984. *Al-Fiqh al-Islāmī wa Adillatuhu*. Damascus: Dār al-Fikr.